

学校、地域、社会の教育資源を活用した学習プログラムの構築と体系化に向けた実践報告 ～生徒の変容の可視化とカリキュラム・マネジメントの視点から～

○鳥谷 直宏（大阪府立農芸高等学校）

1. はじめに

本校は園芸植物の栽培から利用までの全般を学ぶハイテク農芸科、食品の製造加工等、食に関わる全般について学ぶ食品加工科、家畜の飼育・繁殖、畜産物の製造加工等を学ぶ資源動物科の3つの学科を有する。各学科の専門科目において授業や実習を通じて扱う植物・動物の生き物、農産物・加工品の製造方法等の違いにより専攻（課外の農業クラブ活動と連動）を設け、科目「総合実習」や「課題研究」を本校の中核科目に据えて専門性の深化を図っている。

近年、本校では新学習指導要領を踏まえた教育課程を整備する中で、本校の教育資源の再構築と、新しい時代の変化に応じた専門人材を育成するための教育課程の整備など、いくつか課題が前景化してきた。そこで、平成30年度に文部科学省 SPH 事業指定校として採択されたことを契機に、新しい学力観の下で取り組んだ「社会に開かれた教育課程の整備」の実践事例を報告する。

2. 取組概要

育てたい人物像として「チャレンジ精神豊かな地域創生ジェネラリスト」を掲げたグランドデザインを策定した。学力という学校範囲で限定されがちな教育の考え方から、複数の教科横断による社会問題への対応や実践が、現場対応力を高める考え方に移行する。これは農業のスペシャリストであり、地域を牽引するジェネラリストである地域創生ジェネラリストの育成をめざすと共に、持続的な社会実現のために自らが率先してプロジェクトを進めるマインドを持った人材育成をめざすものである。育てたい人物像を育成する資質・能力の3つの柱として、スキル、ビュー、マインドを掲げた。さらに、新学習指導要領を踏まえ、3つの力と関連性のある資質・能力を13項目の資質・能力として整理した。スキルは高度な知識・専門技術として知識・技能の習得に、ビューは環境及びグローバルな視座として思考力・判断力・表現力に、マインドはチャレンジ精神として学びに向かう力・人間性に対応するよう位置付けた。



平成30年度以降、本校では3つの力と関連性のある資質・能力を育むために本校の教育環境に潜在している資源に着目し、「教育資源である学習環境、地域人材等」と「天然資源である未利用有機物」の2つの資源であるリソースを最大限に活用した15の研究活動と共通教科の魅力化に取り組んだ。特に、科目「課題研究」「総合実習」において15の研究活動に力を入れて、より学びを深めるために学期ごとにポートフォリオを導入している。生徒にとっては授業を振り返ることになり、教員については生徒の学びを可視化すると同時に、主体性評価に向けたルーブリック評価の基準作りのきっかけにもなっている。教育課程に基づくカリキュラム・マネジメントの取組においては、学校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントとなるよう、学校全体レベルと授業レベルの単位でPDCAサイクルを細分化して、学校の教育資源はもちろん、地域の教育資源や学習環境の実態を考慮し、Research(調査)を起点にしたRPDCAサイクルを繰り返すことにより、持続可能な教育活動をめざしている。

15の研究活動および共通教科において、全校生徒、保護者、関係企業先、教職員、卒業生にアンケートを実施、ベネッセの学びの基礎診断、府立高校で取り組む学校教育自己診断アンケートと併用している。教員は様々な授業を通じた教育目標の達成度の確認と生徒の強みと弱みを可視化するために、一方、生徒は自分自身がどれだけ成長したのか確認できるよう工夫している。

